

# みどり

社会福祉法人 八千代翼友福祉会 広報誌

第66号

2020.5.1

発行

社会福祉法人 八千代翼友福祉会

〒276-0040

八千代市緑が丘西5-20-2

TEL 047-458-7477

FAX 047-459-9541

http://park17.wakwak.com/~uimidorien/

E-mail: midorien@ca.wakwak.com



皆さまには日ごろから八千代翼友福祉会の運営につきましてご理解とご支援をいただき、誠にありがとうございます。  
当法人は「地域で 普通の大人としての 生活を！」の基本理念を基に、主に障害の重い知的障害者への支援を行ってきました。この度、特定非営利活動法人あごら

## ご挨拶

理事長 奥山 直廣

2020年度より  
「特定非営利活動法人あごらミニキ八千代市手をつなぐ親の会」様の実施事業を本法人で運営することになりました。



ミニキ八千代市手をつなぐ親の会様より解散に伴う実施事業の移譲のお話を受け、お引き受けすることとなりました。  
「あごら・ピータス」は、障害児支援の実績を積み重ねてこられました。「きざし」は、地域に根ざした小規模施設の典型例を作ってこられました。これらの財産を引き継ぐことになり、身の引き締まる思いです。  
今後、基本理念も「地域で普通の 市民としての 生活

を！」と変更し、児童期から成人期を通じた支援を担うこととなります。

社会福祉を取り巻く情勢や環境は難しい課題を抱えてはいますが、利用者の皆様が地域で安心して暮らせるよう福祉の充実・発展に寄与することに努め、今まで以上に利用者本位の良質かつ安心・安全なサービス提供を行ってまいりたいと思います。今後ともよろしく願います。



### ▼ 2020年度よりの実施事業（網掛け部分が新規事業）

共同生活援助	相談支援事業 (児童・成人)	移動支援事業 行動援護事業	生活介護事業		放課後等デイサービス	
もやい	つむぎ	ふくろう	きざし	友愛みどり園	あごら	ピータス

5住居

「ひびき」を吸収

## 生活介護事業所 友愛みどり園

新年度を迎えるにあたって

管理者 吉野 孝

友愛みどり園が、平成14年に開所してから19年目を迎えました。

新年度を迎えたところですが、当園でも新型コロナウイルス感染症の不安に煽られ、予断を許さない日々が続いています。具体的な

集団感染予防のための対策として、施設内の消毒の徹底やイベント等の自粛を余儀なくされた状況が続いています。利用者の皆さんには申し訳ありませんが、今は我慢の時として、健康と安全を第一に考えて取り組んでいきたいと思

います。  
2020年度の友愛みどり園ですが、「側案（はたらくまわりの人を楽にする）」と「個に着目する」をテーマにして実践してまいります。

友愛みどり園では利用者の皆さんは複数の集団（ホーム・生産活動・全体）に属しています。平成19年度の友愛みどり園の研究論文の中に、個人にとつての集団の持つ意味は、①活動の意欲の源泉となり ②「周りの人の役に立つ」ことを通して、自分とその価値を確認する場となり ③まわりの人と比較することを通して自分のあり方を自覚する機会をもたらす（加藤直樹「集団と人格発達」全

障研出版部」と記されています。

これまで集団生活の中で利用者の皆さんは、仲間と意図的な取り組みを通して、様々な力を培ってきたことと思います。改めて側案ことを実感してもらおう中で、自分とその価値を確認し、更なる生活の幅の広がりに繋げてもらえたらと考えます。

もう一方では、個人に着目した取り組みを大切にしていきます。全体として、生産活動では、生産性にとらわれず、利用者が活動に対して手応えや達成感を感じ、側案意欲に繋げることを大切にしたいと思

います。このことがいづれ働く意欲を高めることに繋がると考えます。また、加齢等の影響により、これまでの取り組みに加え身体的なケアが必要な方や、得意なことを仕事に繋げられる方の発見に努め、今ある生産活動の枠にとらわれない個別的な支援を実践したいと思

います。  
これまでの友愛みどり園の歴史を大切にして、利用者・職員が一体となって「挑戦」する年にしたと考えていますので、宜しくお願



## 共同生活援助 ケアホームもやい

新年度を迎えるにあたって

管理者 大久保 健

今年度よりグループホームの管理者になりました大久保です。10年前にこのケアホームもやいができた時に管理者をしておりましたが、10年経って住居の数は5つとなっています。この10年間で築き上げた「暮らしの場」をしっかりと守りながら、利用者にとって「豊かな暮らし」とはどのようなものなのかを考えていきたいと思

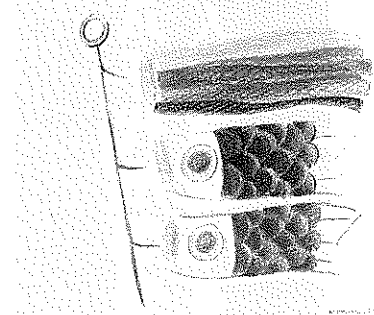
います。  
これまで大切にしてきたことと同様に、グループホームが利用者の皆さんにとって「楽しく、自分らしく暮らせる場」であるよう、職員が一丸となって暮らしを支えてまいります。

昨年度の日中活動（友愛みどり園）への出席率を見てみると、23名の利用者のうち8名の方が100%を記録しました。体調を大きく崩すことなく、日中活動に通うことが出来たということでしょう。この点を見ても、グループホームが利用者の暮らしをしっかりと支えることが出来ていたといえるのではないのでしょうか。それぞれの住居で行う誕生会やドラマイブなどの行事はもちろん、安心して休息できる環境づくりや日々の健康管理など暮らしの土台を

しっかりと維持していくことが重要

です。  
さて、グループホームは当の間、土日などの休日には自宅に帰ることも大切にしてきました。この数年で利用者の土日利用のニーズが膨れ上がっています。このことから、ご家族の状況に変化が生じていることがわかりま

す。近い将来必ずやってくる「全日開所」に向けた安定的な運営体制の確立、具体的には人員の確保が今後の大きな課題となります。  
最後になりますが、グループホームでは今年度の目標として「自分らしい暮らし」を掲げました。私たち支援者が願う、その人らしい暮らしと利用者自身が願う自分らしい暮らしとは違うはずであり、その違いを知ったうえでしっかりとその人の立場に立てるよう感性を磨いていきたいと思



## 相談支援事業所 つむぎ

新年度に向けて

管理者 大久保 理恵

あごらミ子八千代市手をつなぐ親の会で行っていた「相談支援事業所ひびき」の事業委譲に伴い、今年度からは「ひびき」を利用していた方を「相談支援事業所つむぎ」で引き継がせて頂くことになりました。「ひびき」で相談支援専門員を行っていた職員もそのまま「つむぎ」で働いてくれることになり、今年度は昨年度と同じ相談支援専門員が担当させて頂くことになりました。「つむぎ」の利用者は成人の方がほとんどでしたが、「ひびき」では児童の方も利用していたので、これまでとは違う分野との連携も必要になってくると思われま

のつながりが増えることは大きな強みになると思います。その強みを生かし、一人一人の利用者さんやその家族がより良い生活を送れるように支援していきたいと思っています。困った時に「むき」に伝えてみたら何かしてくれるかもしれないから連絡してみようかなと思ってももらえるような事業所になれるように努力していきたいと思っています。現在は新型コロナウイルスの影響で少しずつ利用者さんが通われている事業所に様子を見てもらったり、実際に会ってお話する方が得られる情報が多く、変化にも気づきやすいと思います。早くこの感染症の流行が落ち着き、利用者の方々も安心して生活できるようになることを祈るばかりです。

## 移動支援事業所「ふくろう」

### 新年度を迎えるにあたり

管理者 増田 篤信

移動支援事業所「ふくろう」(以下「ふくろう」)は障害のある方が安心して外出できるようにヘルパーと一緒に外出する事業です(余暇支援)。

「ふくろう」の事業が開始されたのは2005年(当時は制度上、居宅介護事業所「ふくろう」でした)、2020年には16年目を迎える事業所になりました。事業開始当初、利用者ヘルパーは慣れない外出に不安を抱き、手探りで行ってたようです。家族の方も「知らない人に預けるなんて不安」と思う方もいました。「ふくろう」を利用していない家族の中には「ふくろうって何をやっているの?」という声があがっていたこともありました。

今では法人の家族の方にもすっかり認知されるようになりました。また、継続して地域に出かけることで駅員さんやコンビニの店員さん、公園で挨拶を交わす一般市民の方の対応の変化も感じるようになってきました。そして、利用者ヘルパーは地域の中で楽しみに満ち溢れた笑顔で余暇の時間を過ごせるようになってきました。

このように地域で利用者が存

分に余暇の時間を過ごせるようになったのは改めて先人のヘルパー、職員、そして利用者とその家族の功績に他ならないと思います。

新年度を迎えるにあたり、改めて「余暇支援」とは何かを考えてみました。先日、ある家族の方から「ふくろう」を利用するきっかけを伺ったところ、「生活の範囲を広げてあげたかった」とのこと(事業開始当初から利用されている方です)。こだわりがあり、環境の変化が苦手な方ですが、今では毎回ヘルパーとの外出を楽しみにしています。

ヘルパーは利用者の事を知っているが故に苦手なこと、ストレスになりそうなことを取り除いてしまいがちです。そのことが利用者の生活範囲を狭め、新たな楽しみを見つげる機会を奪ってしまうかもしれない、というのをヘルパーは意識しながら支援にあたらなければなりません。

余暇の楽しみ方は人それぞれだと思います。その「それぞれ」をたくさん見つけられるように私たちヘルパーは利用者と一緒に笑い、汗をかき、深く付き合いたいから利用者にとって最高の相棒になれるように取り組みたいと考えます。

## みどりの小部屋

私は、短大の1年生の時から一人暮らしを始め、約2年半が経とうとしています。

何故、お金もない短大生活の時から一人暮らしを始めたのか、その理由は親への反抗期からのスタートでした。しかし、生活するにも食費や光熱費等

と、とてもお金がかかり、授業終わり、休日はバイトに追われる日々になりました。そんなバイトの疲れから、学校の限など遅刻も増え、段々と体も悪くなり生活リズムも崩れてしまいました。

実家に暮らししていた時は、朝起きたら朝ご飯があり、お弁当も準備されていて、帰れば夜ご飯があり、お風呂も沸かしてあるというのが当たり前のような生活を過ごしていました。そんな生活が一人暮らしを始めてからなくなりました。小さな反抗期から始まった一人暮らしがこんなにも自分の生活に影響を及ぼすのだと身に染みるほど実感しました。しかし、そんな私の勝手な行動をしたにも関わらず、両親は、私を心配して、お米を送ってくれました。短大生活では、先生方がお昼ご飯を出してくれたり、職場を一緒に探

してくれたり、たくさんの方に支えられてきました。そんな両親や短大の先生方の支えがあったからこそ、短大も無事に卒業し現在の自分がいるのだと思っています。私の中で一番落ち着く場所は実家だったのかなと思います。

皆さんの落ち着く場所はどこですか?一緒にいて落ち着く人、安心する人は誰ですか?そんな場所や人を大切にしてください。親からすれば大切な娘、息子であって、たった一人の子供なのです。心配もしています。ありがたい「いま」感じることが難しいとしても「今後」大きくなるにつれ分かってくると思います。今の親子の時間がどれだけ大切な事なのかかわかると思っています。

私の短大からの経験談でしたが、貴重な体験になったと思います。その場その場たたくさんの選択肢に遭遇する事になると思いますが、どの道を選んでも間違いないと思います。近くで支えてくれる存在を忘れな

シリーズ

街は温かいか？

第3回 自治会長さんに聞く

今回は、友愛みどり園もその会員となっている八千代市緑が丘西自治会の会長鈴木さんに、「街は温かいか？」に関してお話を伺いました。

Q. 鈴木さんは、当法人の評議員、八千代特別支援学校の「開かれた学校づくり委員会」委員など、「障害」に係る役職も務められていますが、「障害者問題」に関わるようになったきっかけは何ですか？

A. 私には、川崎病を患った妹がいて、小学生時代に田端にあった東京女子医大病院に連れていった経験がありました。両親は共働きで時間がなく、6年生の私が2年生の妹をつれて東京まで連れていたことは今でも忘れていません。また、友愛みどり園については「障害者」の視点として私は見ていないような感じがしています。「普通の方」の施設としてのイメージを持っています。

Q. 現在、自治会長として、「温かい街づくり」のために奔走されていますが、(障害者問題に限定せず)「やってよかった」「成果があった」と思われることを紹介してください。

A. 街の安心安全として「みどりが丘小学校避難所運営委員会」を、皆さんのご協力のもと取り組み、着実に進んでいます。八千代特別支援学校とも防災協定を締結して、更なる関係を深めています。

また住民交流では夏祭りやイベントなどを通して、住民同士が触れ合うきっかけを作れたのがよかったと思っています。

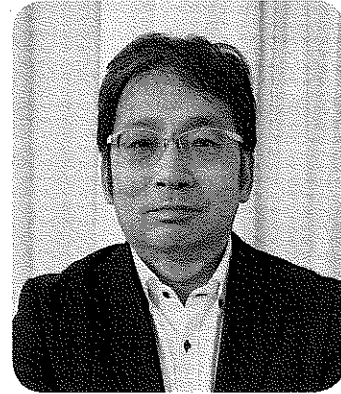
そして国土交通省のモデル事業を実施しており、福島県南相馬市の視察団が来訪し、今後佐賀県や三重県からも視察が来ることになっています。全国的にも注目されている自治会になっています。

Q. これまで「障害のある方」と関わったときのエピソードはありますか？

A. 駅前清掃の時の話です。八千代特別支援学校の生徒さんと一緒に行ったのですが、私は最初、障害の方で「なかなかできないのかな」という印象だったのですが、その生徒さんは、普段私たちが掃除のしない場所を掃除し始めたのです。例えば自動販売機の下など目につかない場所も行ってくれたのです。目の付け所がまたいいなと思いました。

Q. 「障害のある方」と関わっていく中で、大切にしている事はありますか？

A. グリーンフェスなどでも、普通に来て普通に会話をして帰る。特別視をせず、普通の人という視線で、常日頃思っています。



八千代市緑が丘西自治会  
会長 鈴木 介人 さん

Q. これからの課題と思われることは何ですか？

A. 居住者の中には、障害がある方や子供たちの養育において日常生活に不安をお持ちの方がおられることから、耳を傾けて微力ながら支援をしたいと思っています。

社会福祉の担い手を増やすために緑が丘西地区においては社会福祉協議会の地域支会組織がないことから、地域の社会福祉活動を実施する「緑が丘西支会」組織を今後設置運営する必要性を感じており、令和2年度ではそれらの方向性を定めたいと考えています。

Q. 当法人に対して期待することはどのような事でしょうか？

A. グリーンフェスでの地域開放や、自治会でも役員会などの開催のため、施設をお借りすることになります。これらの地域との協同に向けての先行事例として取り組んでいただき、また社会福祉系の施設同士の有機的な交流を進めていただく旗振り役を期待しています。

インタビューを終えて

インタビューを通し、地域との関り、交流がどれだけ大切なのか改めて考えさせられました。私もこの仕事に就くまでは、全く知らない世界でしたが、仕事を通して障害をもった方の素敵な面をたくさん見えました。

仕事の中で地域との交流が増え、そこで地域の方が、優しく声を掛けてくださることや、普通の生活を送れていることが嬉しく思います。これからも地域との交流が増えていくことを願っています。(KN)